

の中心に平安京つまり京の都がございました。

さて、法律による全国一元の政治を実現しようとする政治改革、つまり大化の革新の結果、律令国家が完成し、国は畿内から七つの国道とでもいべき七道を整備しました。七道には駅（うまや）や関（せき）を置きました。国道一号とでもいべき山陽道が都から瀬戸内を通り、西国さらに中国に通じる最重要交通路でした。平安時代、京の都からつまり京都盆地からこの道が出ていく地点が山崎・天王山麓で、ここは都の西の関門でした。東では京都盆地から近江盆地への通路、逢坂山が東の関門でした。山崎から西南へ、大阪平野を斜めに横切った山陽道は、西宮あたりで瀬戸内海々岸部に出ます。その西、芦屋から神戸市旧市街地一帯は、大阪湾岸の海岸線と、平行して走る六甲山地に挟まれた通路状の地形で、これを須磨で通り過ぎると、畿内（首都圏）の摂津が終り、須磨の国に入ります。神戸の旧市街地の山と海に挟まれた通路は首都圏の西の関門になっていました。都の東では、逢坂山の都の東門を出た交通路が近江盆地を通り過ぎ、伊吹山の南麓—伊吹山地と鈴鹿山地との間の谷筋—で、首都圏の東の関門に行きつくのと似ています。都の東西（逢坂山と山崎）、首都圏の東西（関ヶ原と神戸）という、東西2つづつ、合計4か所の関門を考えていただくと、湊川の戦い、つまり楠公さんが神戸で戦った理由が解ると思います。九州から、つまり西方から都に進攻しようとする足利尊氏の軍勢を途中で食い止めるには神戸か山崎で戦うのが最も効果的だったわけです。足利軍は水・陸両軍でしたから、それが合流しようとする瀬戸内海航路東端の港という意味からも、兵庫の津がある今の神戸市の場所が決戦の地に選ばれたわけです。これが、湊川の戦いが行われた理由ですが、神戸では、古代から中世への転換期に一の谷の戦いがあり、中世から近世への転換期にも、織田と毛利の戦い—摂津の花隈合戦と播磨の三木合戦—がありました。中世前期と中世後期の転換期に起こった湊川の戦いを、このように地勢の上から考えるのも興味深いテーマです。どうもご静聴ありがとうございました。

教育週間特別講演 「摂津の古代寺院と瓦」

平成20年11月16日（日） 講師 森 郁夫 氏

島本町は古代から重要な水・陸運の要衝であります。古代の寺院はありませんが、鈴谷瓦窯があり古い時代の瓦が島本で生産されました。摂津国で7世紀後半まで営まれた寺は15ヶ所、ほとんどが重要な交通路に沿って営まれております。7世紀前半に営まれた寺に四天王寺がございます。文献史料では玉造の地に営まれ、後に移されたとあります。斑鳩は、大和盆地を流れる河川が大和川となって河内に流れる重要な土地であります。そこが、島本の地と大変よく似ているわけです。当時の朝廷はそれに着目し、聖徳太子を斑鳩に送り込み、太子は斑鳩宮を営まれ仏教を広められます。この地が交通の要衝であればこそ、高い文化を取り入れた寺院を造ろうとお考えになったのです。四天王寺が何処にあったか、やはり玉造の地ではと考えたくなります。上町台地は難波宮が営まれ、前期難波宮の下層からたくさん瓦が出土しています。これは四天王



寺から出土するものと同じです。瓦を作るときは木型を彫ります。その木型が丈夫であれば何百・何千枚も同じ型の瓦ができ、この同文様を検討しますと寺の事情が分かってきます。実は同文様瓦が法隆寺からも出土しています。法隆寺再建、非再建の動きがありましたが、昭和14年の調査の結果、再建されたものだと分かりました。この調査で出土した瓦をみると、法隆寺若草伽藍で使われた瓦が先行し、四天王寺で使われた瓦が後になります。ですから斑鳩に太子を送り込んで基地を作り、次に摂津に新たな基地を作る。大化の革新後、都を難波に移し摂津国は新しい文化が入る重要な港と考え、すでに建立された四天王寺を移したと考えざるをえないのです。前期難波宮下層に瓦を使った建物があったことから、前期難波宮以前に四天王寺があったと固く信じておるわけです。第1回目の遣隋使が600年に派遣され(教科書では607年)それ以後中国文化が取り入れられました。寺を建てるには大きな力と技術が必要です。日本で最初に寺を作る技術を持ち込んだのは百濟でした。しかし当時朝廷が仏教を受け入れる段階ではなく、蘇我氏に預けられ結果大きな権力を持つのです。出土する瓦には非常に高度な情報が詰められています。他所で蘇我氏が建てた飛鳥寺と同文様瓦が出土し、また太子の斑鳩寺と同文様瓦が出てくる遺跡があります。朝廷が管理する寺で使用された瓦が出土するのは政権中枢部から技術提供を受けていたと考えられ、寺造りの背景に政治的な動きが感じられます。寺は宗教施設であり、先進文化の受け皿であると同時に防御施設ですから、交通の要所に建てられ、その豪族は政権に近づき新しい文化をもらいます。7世紀後半には寺造りが盛んになり、鎮護国家思想が高まります。天武天皇は仏教の力で国家体制を固めようとお考えになりました。壬申の乱が再び起きては困る、そんなことをしていたら朝鮮半島や中国大陆に遅れる、律令国家を作らなければとお考えになりました。いくつかの事件がありましたが、701年、ようやく大宝律令ができました。持統天皇6年に数えましたら545ヶ寺もの寺がありました。これは天武天皇の国家体制を固める強い意思であったに違いありません。この摂津の地でも数多くの寺が建てられるのは、7世紀後半頃、鎮護国家思想のもとに我が国が律令国家に向けて邁進している、非常に活気のある時代であったからだと考えております。

追悼 －奥村 寛純先生を偲んで－

館長 大西 健治



永年に亘り親しくご指導を仰いだ奥村寛純先生が鬼籍に入られて、早や半年が経ちました。先生は伏偶舎郷土玩具資料館を運営される傍ら「郷土島本研究会」を主宰され、島本町に関する多くの論文や著書を世に出されました。特に、昨春の島本町立歴史文化資料館正式開館前後には博学多識で温厚な先生のお人柄を慕い、何度も質問攻めでご自宅に伺わせていただきました。その折は、いつでも優しく丁寧に応対して下さり、先生の深い蘊蓄に耳を傾けるのが訪れた者の楽しみでもありました。今となっては、もう先生に直接お話を伺いすることもできなくなり、先生の遺された資料を活用させていただくことが多いのですが、そのときはいつも在りし日の優しく微笑んでおられる先生のお姿が髣髴としてきて、自然と心が和んできます。